あの日、あの時に感じたこと 考えたこと

消防

リーダーの育成と訓練が課題

八島（やしま）　正寛（まさひろ）さん
白石消防署　署長

3月11日は当番者9人、副署長と私の11人が勤務していました。震度5以上の地震のため、約40分で全署員が集まりました。14時55分、市災害対策本部に副署長を向かわせ、15時15分、公立刈田綜合病院と大泉記念病院に署員を待機させ、消防無線で病院との受け入れ連絡体制を整えました。その後もガス漏れや安否確認などの救急要請が続きました。そして21時4分、郡山で建物火災が発生しました。南部山浄水場からの広域水道本管が破損し、消火栓が使用不能。直ちに消防団の積載車で近くを流れる斎川から取水することにしました。可搬動力ポンプから中継を受け、ポンプから消防団と連携して延焼を阻止しましたが、夜間の消火作業で足元も見えず、雪と風の中での作業のため鎮火までに時間を要しました。消火栓が使えなかったのは初めての経験で、鎮火しましたが、残念ながら1人が亡くなり、5棟の住宅などが全半焼しました。

3月12日の早朝からは、津波被害にあった沿岸部への応援出動を開始しました。仙南地域広域行政事務組合消防本部では、3月11日から4月22日までの43日間で、82隊280人の隊員が名取、岩沼、亘理、山元で救出や捜索活動などを行い、423人を救出しました。

本署からは延べ25日、延べ35人の隊員を派遣。地震から1カ月間は、残された署員で201件の救急要請に対応しました。

自然災害はいつ、どこで起こるか分かりません。普段から一人一人がどのような危機管理を行い、どのように行動すべきかを考えておかなければなりません。日ごろからの備えや訓練が必要だとあらためて考えさせられました。

震災時は、消防団が消火作業や警戒活動などを行い、自主防災組織が避難所への誘導や炊き出し、避難者に対する救護活動を行いました。地元ならではの地の利を活かした活動は心強かったです。それぞれの地域におけるリーダーの育成と繰り返しの訓練が、これからの課題ではないでしょうか。

学びの場を増やしていきたい

梅津（うめつ）　祐二（ゆうじ）さん　白石消防署　救急係長

地震の後、「在宅酸素患者の酸素ボンベの残りが少ない」「透析できる医療機関がないか」「心的ストレスで体調が悪い」といった救急要請が続き、例年より約70件多い救急要請に対応しました。救急車を呼ぶほどではないケースもあり、あらためて災害時に備えた講習会の必要性を感じました。市民の皆さんが学べる場を増やしていきたいと考えています。

地域を守りたい

跡部（あとべ）　敏（さとし）さん
白石市消防団　団長

地震の後、本部幹部は直ちに市災害対策本部に常駐しました。そして、各分団にいち早く被害状況の調査や高齢者などの安否確認、避難所への誘導、警戒などに当たるよう指示しました。

3月12日からは、各分団が住宅被害を詳細に調査。土砂崩れなどの危険のある箇所の応急対策や、停電からの復旧時の火災を防止するため、漏電火災防止の広報活動などを行いました。このほかにも、避難勧告や指示が出された方の避難誘導のほか、地割れ被害へのシート張り作業、避難所運営への協力、道路や高齢者の住宅被害復旧などを行いました。

団員たちは、自分の家を後回しにして「地域を守りたい」と奔走してくれました。震災を経験して地域の人たちと相互に連携し合うことが大切だと感じました。つらい経験でしたが、地域の皆さんと一緒に乗り越えたことで、強い絆が育まれたと思っています。

消防団入団のきっかけ

震災後、新たに消防団に入団した佐藤智弘さんと星昌洋さんに話を聞きました。

自分が率先して人の役にたちたい

佐藤（さとう）　智弘（ともひろ）さん
白石分団第5班　団員

震災後、鷹巣自治会で自主防災組織を立ち上げることになり、消防団の方ともお会いする機会が増え、消防団の方から「一緒にやってみないか」と声を掛けていただきました。

地震当日の夜に火災があり、停電で真っ暗な中、翌朝火を消し止めるまで、消防署の皆さんと消防団の皆さんが消火作業を行っていました。その時、「消防団はすごいな。がんばっているんだな」と強く感じました。

そして、消防の知識や技術を身に付けることは「人の役に立てるのではないか」と考えるようになって、入団することを決めました。

災害は、いつ、どこで起こるか分かりません。その時にパニックに陥らずに、自分が率先して人の役に立てる人間になりたいと思っています。

困っている人を助けたい

星（ほし）　昌洋（まさひろ）さん
白石分団第7班　団員

震災で岩沼市の自宅が津波被害にあって、仙台空港に3日間避難しました。妻の実家がある白石に避難してきましたが、妻がたまたま、消防団の詰め所前を通りかかった時に、班長から「消防団に入らないかと伝えてくれ」と、声を掛けられました。

知らない土地に来て「消防団に入れば、早く白石になじめるのではないか」という気持ちと、何よりも震災の時に、消防団の方から津波が迫ってきていることを知らされなければ助からなかったことを思い出し、「災害があった時に困っている人を助けたい」という気持ちが強くなって、入団を決意しました。

「大変だろうな」と思っていましたが、火災の消火を経験し、「大変」だという気持ちよりも、「助けたい」という気持ちの方が強くなりました。

郷土愛の精神に支えられた住民組織

その地域に住んでいる人や働いている人が、「自分たちのまちを、自分たちで守りたい」という想いのもとに集まり活動しているのが「消防団」。多くが、仕事や子育てをしながら、さまざまな活動を行っています。あなたの力を消防団に！

分団名	定員数	団員数
本部	3	7
白石分団	122	99
越河分団	72	65
斎川分団	57	55
大平分団	54	55
大鷹沢分団	72	75
白川分団	63	65
福岡分団	160	154
小原分団	97	69
合計	700	644

●**設立年月日**　昭和29年4月1日
●**分団数**　8分団　●**団員数**　644人（2月末現在）
●**平均年齢**　45.96歳
●**職業形態**　主にサラリーマン団員（80.4％）
●**活動状態**　定期的に水利点検、火災予防運動中や年末年始の警戒など

問生活環境課　☎22-1314

地域のつながりが広がる

跡部（あとべ）　清（きよし）さん
白石分団第5班　班長

消防団は、地域に住んでいる人と働いている人で構成されています。自分たちのまちを自分たちで守るために、年齢や職業を問わずいろいろな方が参加しています。世代を超えた交流があり、地域とのつながりが広がっていくのがいいですね。

身近な人の役に立てる

末谷（すえや）　仁（じん）さん
白石分団第7班　班長

人と人のつながりによる地域の活性化や仲間づくりという意味でも、消防団の役割は大きいと思っています。「地域や家族を災害から守る」という想いで、地域社会貢献といったら大げさですが、身近な人の役に立てるのではないかと思っています。